

K教育〔自由〕 10月26日（日）15：15－17：15 23号館209

座長：高田幸男（明治大学）

報告1：莊千慧（大阪大学文学研究科比較文学研究室外国人招聘研究員）

近代中国における神智学協会の教育事業——列強と中国との相互的牽制をめぐって——

報告2：劉建雲（日本大学理工学部非常勤講師）

中島真雄と日清貿易研究所

報告3：花井みわ（早稲田大学社会科学総合学術院）

戦前中国東北延辺地域における日本人の教育活動と朝鮮族の教育

——光明中学校の展開と朝鮮族の近代的な教育の受容——

報告1：莊千慧「近代中国における神智学協会の教育事業——列強と中国との相互的牽制をめぐって——」

要旨：従来知られているように、外国人によって行われた中国人教育の機関は、宣教活動の一環として清末から中国各地に多く見られる。その教育に自国文化の危機を意識し、中国政府は1925年から教育権回収の政策を打ち出した。その回収運動により、列強と中国における衝突や牽制が教育機関の中で共存するようになった。このことは19世紀末の東アジアに共通する、支配体制の揺らぎ及び外圧と植民地化への危機の一例として想起させられる。この時局の中で、多元的な視座から東西の交流を促すことに一役を買った神智学協会（Theosophical Society）が神智学という西洋と東洋の神秘思想や宗教を巧みに融合した宗教的思想体系を中国で広めるため、1925年に上海の公共租界で第二代会長のアニー・ベサント（Annie Besant）の名前を巧妙に「培成」と訳し、「培成女中」という中国人を対象とした女子中学を創立した。明治期の日本仏教界は仏教復興のために神智学と接触し、その受容は欧化主義への反発や東西思想の総合とも関連していた。近代中国における神智学運動は成功したとは言えないが、同協会によって行われた教育事業は上海の中国人社会で支持を得て、米英の租界を管理する工部局からも助成金をもらっていた。しかし、その成功とは裏腹に、上海の神智学学校は在学生でさえ神智学協会を正確に認識していなかった。よって、上海の神智学学校は中国と列強との葛藤や衝突を教育面からその一隅を窺うために重要な存在と言えよう。

本発表では、まず神智学協会が中国に上陸した1920年代からその姿が見られなくなった第二次世界大戦までの上海租界における、列強と中国政府の教育権をめぐる斡旋について確認する。その上、同協会の性格や中国での受容に関する検討も行い、神智学協会が教育事業でのみ中国で成功した理由を探る。従来あまり知られていない中国の神智学学校を論考することにより、近代中国で起こった列強との衝突史を新たな切り口から捉えなおすことを試みる。

## 自由論題 K教育

報告2：劉建雲「中島真雄と日清貿易研究所」

要旨：中島真雄は、戦前中国大陸に活躍した新聞人として近年研究者の間で頻りに言及されるようになった。彼によって創刊された『順天時報』（1901）・『満州日報』（1905）・『盛京時報』（1906）などの新聞紙もさまざまな視点からの把握と研究が試みられている。しかし、中島真雄はどのような人物なのか、詳細はいっさい解明されていない。また、彼が編纂を主宰した『対支回顧録』上下と『続対支回顧録』上下という計4,700頁を超える巨著は、その編纂の時代により「対支功労」の誇示や大言壮語癖の匂いがするが、近代日中関係の歩みを知るために欠かせないたいへん重要な資料となっている。なのに、中島自身の存在が東亜同文会という立派な組織看板の下で看過されるおそれさえある。

それはそれなりの事情もあると思われる。中島真雄には日記も当時の「志士」によく見られる特定の軍や政府部門への報告書のような物も残っていない。「肝腦」を傾け尽して完成した『対支回顧録』と『続対支回顧録』のどこにも彼の伝がない。唯一『不退庵の一生—中島真雄翁自叙伝』という計55頁の非売品の印刷物があり、『対支回顧録』の不完全さへの「補遺」として見なされ世に伝わっているものの、これまた中島真雄の自筆のものではなく、加藤進という人に「口授筆記」させた形のものである。内容も粗略で、中島の大陸活動と『対支』編纂の全貌に近づけるにはとても不十分なものである。だが、そこに記された出来事や人物を手掛かりにして丹念に調査して行くと、その時代の人や人間関係が一部ではあるがだんだん見えてきた。

本発表は、中島真雄の生い立ちと荒尾精・根津一との出会い、および日清貿易研究所との関わりを中心に考察し、在中国の新聞事業に躍起した彼の原点に迫るものである。日清貿易研究所については従来の研究にいて多く明らかにされてきたが、なお残される課題がある。本発表を通じてその研究のさらなる前進と深化にも何らかの寄与ができれば幸いである。

報告3：花井みわ「戦前中国東北延辺地域における日本人の教育活動と朝鮮族の教育——光明中学校の展開と朝鮮族の近代的な教育の受容——」

要旨：本報告では、1926年、日本人である日高丙子郎が個人で経営した吉林省龍井光明中学校の展開過程と朝鮮族の受け止め方について考察することを通して、日高の教育活動と朝鮮族の近代的な教育の受容過程との関係を明らかにしたい。

龍井には、1920年代に、朝鮮人教育を対象とした中学校が6校あった。朝鮮人経営中学校が2校、キリスト教会経営中学校が2校と日高が経営する光明中学校と光明高等女子学校であった。

光明中学校は、もともと朝鮮人が経営する中学校であったが、経営難のため、日高に譲渡された。朝鮮人は体系的な学校教育を求め、日高に「学校の昇格」を要望した。

日高は、譲渡後学校経営を立て直し、学校の設備、教育内容の改善を行った。ほかの中学校と違って、日本語教育を強化し、日本語による授業を行い、帝国大学卒などの優秀な教員を日本から招き、教科書は日本国内のものを使った。

## 自由論題 K教育

更に、日高は 1935 年に光明中学校を日本の外務省の在外指定学校に昇格させた。在外指定学校になってから、光明中学校卒業生の日本帝国支配圏における進学、留学、就職の道が広く開けるようになり、光明中学校入学希望者は多く、光明中学校は上のランクの学校になり、入学は最も難しい学校になった。光明中学校卒業生は母校を誇りに思っていた。卒業生の中には戦後韓国で初代国務大臣となった丁一権のような人物もいる。

光明中学校の経営は、日高が 1921 年に設立した光明会の主要な事業であった。光明会の目的は「民族ノ融和」であり、光明会には朝鮮人、中国人、日本人の 3 民族で構成されていたことは日本政府に対する抵抗とは違うものであった。